フランスのタミル人

杉本 良男（すぎもと よしお）
民博 名誉教授

「ディーパンの闘い」

原題：Dheepan

2015年／フランス／フランス語・タミル語・英語／115分
監督：ジャック・オディアール
出演：J・アントニダーサン、カーリーシュワリ・シーニワーサンほか
みんぱく映画会にて上映（2018年3月）、DVDあり

映画「ディーパンの闘い」はスリランカの民族紛争を背景に、難民としてフランスに渡ったタミル人ヘ偽装V家族の苦難の軌跡を描いている。スリランカの紛争はあくまで後景で、移民、難民が流れ込むフランス社会の不安定性が主題である。主人公ディーパンの「家族」は、苦労してスリランカを逃れ、フランスにたどり着いたものの、そこにはあらたな苦難が待ち構えていて、決して安住の地にはならなかった。スリランカの紛争は、一九八三年に始まり二〇〇九年に終結宣言が出されるまで、四半世紀にわたって続いた。この紛争を直接取り上げた作品に、「頬にキス」（マニ・ラトナム監督）や「マツリの種」（サントーシュ・シヴァン監督）などの秀作がある。

スリランカの民族紛争

スリランカは人口約二〇〇〇万人あまりの島国で、多民族、多宗教が共存している。全人口の約七割を占めるシンハラは、シンハラ語を話し、おおむね仏教を信仰している。人口の一五パーセントほどのタミルは、南インド、タミル・ナードゥ州からの移住者の末裔（まつえい）で、基本的にヒンドゥー教徒である。ほかに少数ながらイスラム教徒、キリスト教徒もいる。

紛争のきっかけになったのは一九八三年の暴動である。この年の七月にタミル人が多く住む北部のジャフナ近郊で、シンハラの兵士一三人がタミル・ゲリラに殺害され、その後シンハラからタミルに対する報復が組織的に始まった。紛争は次第に拡大し、タミル側は過激派組織「タミル・イーラム解放の虎」（LTTE）が北部から東部にかけて拠点を築き、政府軍と対峙（たいじ）した。両者は一進一退を繰り返したが、M・ラージャパクサ大統領の強硬策が功を奏して終結に至った。

住宅地のなかのヒンドゥー寺院（パリ、ラ・シャペル地区、2014年）

タミル系の商店が立ち並ぶ北駅東側
フォーブール・サンドニ通り（パリ、2014年）

タミル難民苦難の歴史

紛争の影響は特にタミルの方に深刻で、八三年暴動のあと島を離れる者があとを絶たなかった。当時の冷戦構造を反映して、人びとはまずビザなしで東ドイツに入り、その後ベルリンの壁を乗り越えて西ドイツに入ったなどと噂（うわさ）されていた。経路はともかく、結局スイス、フランスなどに流れ着いた人びとが多かったという。なかにはドラッグの密売などで生計を維持する者もあって、周囲からはうさんくさい目で見られていたようである。

映画の舞台になったフランスには数万のスリランカ系タミル人が定着している。首都のパリにはさまざまな人びとが集まっているが、市の北東部の一〇区にあるパッサージュ・ブラディは、おもにインド系、パキスタン系などの人が店舗を構えている。さらに北に向かうと、パリ北駅の東側にはスリランカ出身者の多いフォーブール・サンドニ通りがあり、道の両側にタミル語まじりの看板を掲げた商店が並んでいる。ここには一九八三年ごろからタミル難民が暮らし始め、現在では通り一帯を占めている。その少し北側のラ・シャペル地区の住宅街にはヒンドゥー寺院もある。このあたりに住むタミル人はほとんどがLTTEシンパだといわれる。もともとこの地区は中東系の人びとが多く住んでいたが、タミル人も加わって状況はさらに複雑化した。

J・アントニダーサン

主人公を演じたJ・アントニダーサンは、一九六七年スリランカ北部の生まれ。十代半ばでLTTEに参加し、一九八七年にコロンボで逮捕された。翌一九八八年に釈放されると、ビザなしで入れた香港に逃れ、バンコクを経て、一九九三年に政治難民としてフランスに渡った。パリでは皿洗い、道路掃除など多くの仕事を経験した。その経歴は主人公ディーパンと重なっている。九〇年代末からはショーバー・シャクティの筆名で文筆活動に入り、映画にも出演するようになった。

相手役のカーリーシュワリ・シーニワーサンはインド・チェンナイで舞台女優をつとめている。映画では、ジャフナなまりのあるタミル語を話さなければならなかったが、アントニダーサンやチェンナイの難民キャンプにいる友人などから教わったという。子役のクロディーン・ウィナシタンビは、役と同様にスリランカ移民の子である。

パリ市内に住むスリランカ系タミル人は、次第にフランス社会に溶け込みつつある。しかし、世界の情勢は移民、難民が簡単に同化することを拒む傾向も強くなっている。フランスのタミル人の将来は安穏としたものではない。映画のラストシーンは夢かうつつか、その受け取り方は最終的に観客に委ねられる。